



●錐体細胞の感度測定

色の見えに関わる錐体細胞は、L（赤）M（緑）、S（青）の3種類あり、それらの錐体の感度が弱い、または欠損していると色覚少数派となり、赤と緑の見分けがつきにくいなど色の見えに影響があります。一方、すべての錐体細胞が正常である色覚多数派に関しても色の見え方が異なることは予想され、それには各細胞の感度が影響しているかもしれません。先日、私は各錐体の感度を測定できる機器を体験してみました。

コーナンメディカル（株）製の（https://konan.com/ja/products_pdf/CT-HD22.pdf）検査装置です。私はL錐体の感度は良く、左目のS錐体の感度は低かったようです。加齢によって、人は青の錐体の感度が徐々に低くなるということなのでこの結果は妥当なのでしょう。また、他の色覚多数派の参加者の感度も様々で興味深い経験でした。色の見えに関しては感度のみでは説明がつきにくいこともあるでしょうが、例えば、色彩のプロと一般の方の感度を比較して、前者が全てにおいて高い結果が得られれば、色の熟達、すなわち、後天的に色について学習できることが明らかになるかもしれません。（幹事 昆野照美）

●日本の伝統的な色名 緑青色

色名の緑青（ろくしょう）は、銅の錆の色に由来する。また、貴石の孔雀石（マラカイト・緑石）を細かく砕いた顔料も緑青と呼ばれる。

緑青は仏教伝来とともに、中国から日本にもたらされた顔料である。

鉱物質の顔料は、水中で細かく砕くと白っぽくなっていき、緑石を砕いた微細で、ごく薄い色の顔料は白緑と呼ばれる。中間の緑が中緑、下に沈んだ最も粗いのが緑青で、製法は水簾とか比重選鉱法と言われる。

緑青は、孔雀石から取れるので石緑の別名がある。

日本において、最も神聖な建物は、朱塗りにするという文化が芽生え、政治権力とも結びつき、高価な朱の顔料は、制限されながら用いられてきた。

その朱色を引き立てる色として、反対色に当たる緑青色が寺社建築の窓格子の塗装などに習慣的に用いられるようになった。

また、銅や銅合金は空気中の水分と炭酸ガスによって、薄緑色の塩基性炭酸銅となり、銅板葺きの神社仏閣の屋根の薄緑色も緑青色である。朱色と緑青色は、陰陽五行説の朱雀と青龍の色に当たる。（永田泰弘）

●大辞泉ひろい読み 98- こ、さ

紺土佐：こんどさ。紺色染めの厚い和紙。雨傘、本の表紙などに用いた。土佐国製が上質とされた。

紺村濃：紺斑濃：こんむらご。染め色の名。地を薄い紺色にし、所々を濃い紺色に染めたもの。こむらご。

紺屋：こんや。こうや（紺屋）に同じ。

紺瑠璃：こんるり。紺色で光沢のある瑠璃。また、そのような色。

彩衣・綵衣：さいい。美しい模様のある衣服。

彩雲：雲の縁が美しくいろどられる現象。雲の水滴による光の回折で生じ、主に高積雲にみられる。

彩管：さいかん。絵を描く筆。えふで。画筆。

彩光：さいこう。美しい色の光。

採光：さいこう。室内に日光などの光線を取り入れること。

彩色：さいしき。色をつけること。いろどり。

才色：さいしよく。女性のすぐれた才知と美しい顔だち。

才色兼備：さいしよくけんび。女性が優れて才知と美しい顔かたちをもっていること。

采色：さいしよく。風采と顔色。顔つき。色どり。また、女性の美しい顔だち。

*大辞泉：小学館発行国語辞典（永田泰弘）